



青年学者文库

《诸道听耳世间猿》对 戏剧作品的受容

『諸道聴耳世間狙』
における演劇作品の受容

王欣 著



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

本成果受到武汉大学外语学院科研经费支持



青年学者文库

《诸道听耳世间猿》对 戏剧作品的受容

『諸道聴耳世間猿』
における演劇作品の受容

王欣 著



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

《诸道听耳世间猿》对戏剧作品的受容/王欣著. —武汉: 武汉大学出版社, 2014. 10

(青年学者文库)

ISBN 978-7-307-14368-5

I. 诸… II. 王… III. 话剧剧本—文学研究—日本—近代
IV. I313.073

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 213294 号

责任编辑: 叶玲利 神田英敬 责任校对: 汪欣怡 版式设计: 马 佳

出版发行: 武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷: 湖北省荆州市今印印务有限公司

开本: 787 × 1092 1/16 印张: 14.5 字数: 227 千字 插页: 2

版次: 2014 年 10 月第 1 版 2014 年 10 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-14368-5 定价: 29.00 元

版权所有, 不得翻印; 凡购我社的图书, 如有质量问题, 请与当地图书销售部门联系调换。

凡 例

一、『諸道聴耳世間狙』の本文引用は『上田秋成全集』第七卷（中央公論社、平成二年八月二十五日）に拠った。

一、文中の年次の記載については、元号と西暦を併記した。

一、論文のタイトルは「」で統一し、書名や雑誌名は『』で示した。

一、引用に際して、旧漢字は新漢字に適宜改め、ルビも適宜省略した。

一、引用中に／と記した場合は、原文での改行を示している。

一、引用に際して、原文の誤植・誤字と認められる箇所は、ママと示した。

一、注は文中の（ ）内にアラビア数字で示し、各章ごとに、章の最後にまとめて記載した。

一、図表資料を参照する場合は、文中に【表1】のように示し、参照する図表は文中に組み込んだ。

一、敬称は省略した。

目次

凡例	1
序章 『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の受容の再検討	1
第一節 浮世草子としての『諸道聴耳世間狙』	1
第二節 『諸道聴耳世間狙』の研究史	7
第三節 本論文の立場と構成	11
第一章 『諸道聴耳世間狙』一之巻一における演劇作品の受容	21
はじめに	21
第一節 「三割の口銭の徴収」における人物造型と展開の異同	24
第二節 歌舞伎『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の展開	30

第三節	「三割の口銭の徴収」における展開の共通性	3
第四節	「三割の口銭の徴収」における人物造型の変更と趣向の置換	6
おわりに		0
		4
		9

第二章 『諸道聴耳世間狙』三之巻三における演劇作品の受容	5
------------------------------	---

はじめに	5
	9

第一節 舞子宇治江の人物造型	6
	1

第二節 「石河五郎市の転落譚」における展開の異同	6
	5

第三節 「石河五郎市の転落譚」における展開の共通性	6
	9

第四節 「石河五郎市の転落譚」における人物造型の変更と趣向の置換・添加	7
	4

おわりに	8
	5

第三章 『諸道聴耳世間狙』四之巻三における演劇作品の受容	9
------------------------------	---

はじめに	9
	2

第一節 「知識問答」における人物造型の異同と展開の共通性	9
	5

第二節 「知識問答」における人物造型の変更と趣向の置換	1
	0
	4

第三節 「恋問答」における人物造型の異同と趣向の配置	1
	1
	2

おわりに	1	2	2
第四章 『諸道聴耳世間狙』五之巻一における演劇作品の受容	1	3	0
はじめに	1	3	0
第一節 「狐釣り」における展開の異同	1	3	1
第二節 「狐釣り」における人物造型の異同と展開の共通性	1	3	5
第三節 「狐釣り」における人物造型の変更と趣向の置換・添加	1	4	0
おわりに	1	5	4
第五章 『諸道聴耳世間狙』五之巻二における演劇作品の受容	1	5	9
はじめに	1	5	9
第一節 「天狗との出会い」における展開の共通性	1	6	1
第二節 「天狗との出会い」における人物造型の変更と趣向の置換	1	6	7
第三節 「金比羅参詣」における展開の共通性	1	7	7
第四節 「金比羅参詣」における人物造型の変更と趣向の置換・添加	1	8	4
おわりに	1	9	3

終章 『諸道聴耳世間狙』における演劇作品受容のあり方	201
参考文献一覧	207
初出一覧	221
あとがき	223

序章 『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の受容の再検討

第一節 浮世草子としての『諸道聴耳世間狙』

明和元年（一七六四）十一月に、上田秋成（一七三四—一八〇九）の作品『諸道聴耳世間狙』の開板願書が出され⁽¹⁾、明和三年（一七六六）正月に、「和訳太郎」の署名のもと、『諸道聴耳世間狙』⁽²⁾が出版された。『諸道聴耳世間狙』には、多数の後版本が現存している⁽³⁾。その中で、天理図書館蔵山田屋嘉右衛門版の『諸道聴耳世間狙』の見返しには、「浪速和訳太郎著／諸道／聴耳／世間狙 全五冊／当時流行の珍説を／聴あつめ故八文字が／文勢に倣ひて怜何可／笑かきたる話本なり／芝翠館蔵」とある⁽⁴⁾。「故八文字が／文勢に倣」という記述から、『諸道聴耳世間狙』と八文字屋本との関連性が見出せる。

さらに、『諸道聴耳世間狙』が出版された明和三年（一七六六）の冬に書かれた『世間妾形氣』⁽⁵⁾の序文では、

八文字が草紙。其磧自笑の戯作多かる中に。近世俗間の模様有とあるまゝの序に。鶴翁が糸口引
そめし。伝授車の綱手にすがりて。商賈のそろ盤形機書出れば。親爹の吝嗇質氣は其中に求めた
りと見ゆ。石磨藝に親の財を空し。悪所がよひに家蔵を失ふ。むす子の我まゝ形氣やむ時ぞなき。
それ諫かねし忠心の手代形氣。母おやかた氣の愛憐もよむにさこそと感あり。又小むすめの婚婿

待で。こがれまいらせの儚ならひ。若紫の歌舞妓子に思はくよするまで。偕もかしこしや。狸老が筆談。真似てまねゑんか。誠にまねられず。(中略) さてもく八文字が糟粕。これを除き是を棄て。そゞろにものして十種に充しめ四巻に已ぬ。自笑をしれる人は嘲みなん。自笑を知らざる人は見ずも棄べし。

(傍線引用者)

という内容が見られる。『世間妾形氣』が、井原西鶴、江島其磧、八文字屋自笑、多田南嶺の八文字屋本を意識しながら書かれた作品であるということは、『世間妾形氣』の序文から読み取れる。また、『諸道聴耳世間狙』の初版の奥付に、『世間妾形氣』の近刊予告が出された(6)ことから、『諸道聴耳世間狙』と『世間妾形氣』が近い時期に創作された作品だと言えよう。それ故、『諸道聴耳世間狙』は、『世間妾形氣』と同じく、西鶴、其磧、自笑、南嶺の作品から影響を受けたと考えられる。

長谷川強の『浮世草子の研究』(7)では、浮世草子の定義について、次のように述べている。

浮世草子の称は元禄末宝永頃はほぼ好色本と同義に用ゐられてゐたが、正徳頃に至り町人物・氣質物が書かれ出し、西川の三巻本を好色本と称するやうな情勢にあつて世態・人情を描く草子といった気味に傾くやうになつた。しかし享保の長篇の時代物が小説の主流を占める時期を迎へて読本・草紙の称にとつて代られ、元文末頃からは読本の称が専ら用ゐられるやうになつた。以後時に浮世草子の称が用ゐられる場合は史的な回顧的な用語としてであつたらしい。そしてこの場合は全く当時の世態・人情を写した本として考へられるやうになつてゐる。(中略) 化政期に至り新し

い江戸の読本の隆盛期を迎へるとともに、それと区別し改めて浮世草子(浮世本)の称を以て西鶴やその周辺作者の作や八文字屋本を呼ぶやうになつた。(傍線引用者)

長谷川強の指摘では、浮世草子は、「西鶴やその周辺作者の作や八文字屋本」という類の本を指し

ている。そのため、明和三年に出版され、西鶴、其磧、自笑、南嶺の作品から影響を受けた『諸道聴耳世間狙』は、浮世草子と称することができると考える。

また、『世間妾形気』の序の「鶴翁が糸口引そめし。伝授車の綱手にすがりて」に示されたように、浮世草子は、西鶴の『好色一代男』に始まり、その後、其磧、自笑、南嶺らが多くの浮世草子を世に送った。

浮世草子の鼻祖として知られる西鶴の浮世草子における素材の受容方法について、野間光辰の「西鶴五つの方法」(8)では、

物語・小説の作といふものは、聞書・記録の如きものとは違つて、作者の工夫・用意が何よりも大切であつて、描写の迫真と共に、趣向の面白さ・仕組の巧妙さが読者に最も喜ばれた。描写の迫真といつても、ただ見聞の事実を生のまま投げ出したのでは、それは作でも作者でも何でもない。事実と虚構との間、つまり虚実皮膜の間にこそ、作の面白さがあり作者の苦心があるのである。(中略)西鶴は一般にいられるやうに、ただ見聞の事実をもとにして書いた作者ではなく、また見聞の事実しか書けなかつた作者でもない。西鶴はもつと複雑で、職業的的作者として積極的意欲的に、素材を多方面に求めて書きまくつた。

(傍線引用者)

と、「事実と虚構」を巧妙に織り交ぜ、積極的に多方面から素材を求め、工夫しながら創作活動が続けた西鶴の姿勢が評価された。西鶴以後の浮世草子作者其磧、自笑、南嶺らも西鶴の衣鉢を継ぎ、当時の読者の好みに応えるよう、市井巷間に題材を漁った。

そして、作品に取り入れられた素材に関して、『諸道聴耳世間狙』の序文には、

おもはくは我こゝろより出て人の口にかはりゆき。貂となり鼬となる。其尾に喰つく世の噂を。

天に口なし。婆嬭のそしりはしりにも。いは猿のいましめをまもれば。こけ狙の指ざしにあふ。さらば尻わらひの戯れ草を朝三暮四の筆まめに書聚めて。題号を。聴耳世間狙とよぶ事は。見猿の人の伽ともならんかし

(傍線引用者)

と記されている。つまり、『諸道聴耳世間狙』の素材は、「世の噂」、「戯れ草」と関わっているのである。

さて、なぜ西鶴、其磧、自笑、南嶺など先行浮世草子作者も、上田秋成も、多岐にわたる素材に惹かれたのだろうか。その原因について、浅野晃は、「西鶴と歌舞伎・浄瑠璃」(9)で、次のように分析した。

このような新しい趣向をもった読みものを「なぐさみの種」として「各々様の興」に呈しようと言っている所に、当時の読者の好尚に敏感に反応し、読者に対するサービスを主眼とする商業出版者の基本的な姿勢を見ないわけにはいかない。浮世草子は、このような商業ジャーナリズムと常にかかわりあいながら、小説的な主題を追求しなければならぬ宿命を負わされているのである。つて、西鶴の浮世草子もまたその例外ではなく、西鶴以後の作品にあつても、小説的な主題と読者の好みに投ずる趣向との間をたえず揺れ動きながら展開を続けていくことになるのである。

この場合の趣向としては、やはり、浄瑠璃や歌舞伎の演劇的な趣向がもつとも多く採用されてくるのであつて、とくに所謂八文字屋本と呼ばれる一群の浮世草子に見られる歌舞伎的な趣向は、ほとんど枚挙にいとまがない程である。

(傍線引用者)

この記述によれば、浮世草子が、出版ジャーナリズムと関連しているため、浮世草子作者は常に、読者の好みに応じて、創作活動を展開していたのである。それ故、浮世草子作者は、読者の好みに応

えるように、素材を広範にわたり、探し求めていたと考えられる。それに加えて、浅野晃の指摘によれば、読者に「なぐさみの種」を提供するため、最も多く浮世草子に取り入れられた趣向は、演劇作品からの趣向である。

では、浮世草子作者は、どのように演劇作品に接近し、演劇作品から趣向を摂取したのであるうか。鈴木敏夫の「大坂出版界の興隆」では、浄瑠璃正本の出回りに関して、「本来は浄瑠璃の脚本のはずの、いわゆる正本が、むろん近松作品を主として、大衆の読物としても迎えられたのは、浄瑠璃・歌舞伎の流行もあつたが、筋立てが巧みであり、当時の町人の嗜好にも大いに叶ったからであろう」と指摘した（10）。また、絵入狂言本は、元禄期を最盛期として約二百種ほど刊行されていた（11）。そして、長友千代治の「読物としての浄瑠璃本」では、西鶴の『好色二代男』、『好色一代女』、其磧の『世間手代気質』、『風流曲三味線』、浄瑠璃本『心中宵庚申』、『信田森女占』などにおける浄瑠璃本が読まれた描写を抽出し、当時、劇場の操浄瑠璃興行に合わせるなどして、随時刊行されていた浄瑠璃本が日常的に身近に読まれていたことを論証した（12）。さらに、長友千代治は、宝暦十一年（一七六一）五月『由良湊千軒長者』の見返しの「此本何方江御備被成候共／御覧之上又備無之早／御戻し可被下候／本主一山路／宝暦十一年巳八月求」という内容から、浄瑠璃本が版行された後、すぐ貸本屋の備蓄になったことを指摘し、読物として浄瑠璃本が普及するには、浄瑠璃本屋のほかに貸本屋の役割が極めて大きかったと結論付けた（13）。こうした時代背景の中で、演劇と関連する多くの作品は、人々に愛好され、広く読まれていたと考えられる。

そのほか、西鶴と芝居の世界との結びつきを確かなものとして裏付けるのは、俳諧を媒介とする西鶴と芝居関係の俳友との交渉である（14）。其磧も自笑も、本屋の主であって、役者評判記にも携わり、浄瑠璃・歌舞伎などの演劇に詳しい人物である（15）。南嶺が役者評判記の代作を行ったこともすでに検討されている（16）。このように、人々が様々な形で演劇界とつながりを持っていたため、浮世草子作者は、読者の好みに応えるように、演劇関係の趣向を浮世草子に多く取り入れたと想定される。

先行浮世草子と同じく、『諸道聴耳世間狙』の中でも、「中村吉右衛門の物まね」、「富十郎がお初」、「海老蔵」の来坂、「お初徳兵衛が道行」、「矢の根曾我の荒事」、「中村勘三が二の替り」、「近松門左衛門が筆まめ」、「関寺小町を諷ひだす」、「貞五郎や藤九郎が釣狐の狂言」など役者名、役名、作者に関する内容が見られる。

芸能や演劇が制作上好個の素材であり、世間にも流通している共有知識であつたため、『諸道聴耳世間狙』の中でも演劇関係の要素が多く受容されたと考えるのが自然である。ところで、『諸道聴耳世間狙』が創作された当時、上田秋成は演劇界とどのような交渉を持っていたのであろうか。

若い時の上田秋成の生活状況は、『諸道聴耳世間狙』の創作から近い時期に書かれた『世間妄形氣』の序から読み取れる。

荒にし我軒は。いつしか浮浪子の中宿となりて。長き代のかたみにはあらで。荒唐世説を。いはざれば夜食の腹ふくるゝよと。宵よりつどひて七つの鐘聞く夜はあまたゝび。

父の没後、若主人と女ばかりの上田家には、「浮浪子」が何も遠慮せずに入入りし、浮世話に夜を更かすことがよくあつたのであろう(17)。そのような「浮浪子」の供して悪所へも出入りすれば、自然に色酒の席で、役者仲間や浄瑠璃の太夫、三味線引きとも近付きになり、芝居話や役者生活に触れる機会も多かったと想像できる。しかし、所詮想像は想像に過ぎない。

上田秋成と演劇界の交渉は、上田秋成の俳諧活動に関わつていたと考えられる。「わかい時は、人のすゝめて、俳かいといふ事習ふたれは、さつてもくゝよい口しや、とほめられ」た(18)上田秋成は、宝暦年間すでに高井几圭に俳諧を習い(19)、小野紹廉、初世十南斎鹿白羽、桜坊滝沢舞雪、二条庵笛十、老桂窩山口波光、五彩堂椎本矩州らと俳友になつた(20)。その中で、高井几圭は、今春流の大鼓を打ち、その師匠速水伊左衛門より苗字をもらひ、速水傳左衛門と称した(21)。小野紹廉及び紹

廉の門下の初世十南斎鹿白羽、桜坊滝沢舞雪、二条庵笛十は、紀海音と親交のあった人々である⁽²²⁾。また、二条庵笛十は、江戸時代中期の浄瑠璃太夫、浄瑠璃・歌舞伎作者で、春草堂の名で浄瑠璃『女舞劔紅楓』や歌舞伎『染綱武蔵鑑』などを書いた。寛延二年(一七四九)から難波三蔵の名で、豊竹座の浄瑠璃作者となった⁽²³⁾。さらに、上田秋成の俳諧活動を俳書への入集状況から見れば、秋成の俳諧活動が一番盛んに行われた時期は、宝暦年間である⁽²⁴⁾。よって、宝暦年間に完成され、明和元年(一七六四)十一月に、開板願書が出され、明和三年(一七六六)正月に、「和訳太郎」の署名のもと、出版された上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間狙』では、演劇関係の素材が多く受容されたことは、上田秋成が俳諧活動を通じ、演劇界に接近したと関連していると考えられる。

第二節 『諸道聴耳世間狙』の研究史

前述したように、『諸道聴耳世間狙』の序文から、『諸道聴耳世間狙』に用いられた素材と「世の噂」、「戯れ草」との関連性を見出すことができる。また、前掲の天理図書館蔵山田屋嘉右衛門版の『諸道聴耳世間狙』の見返しには、

浪速和訳太郎著／諸道／聴耳／世間狙 全五冊／当時流行の珍説を／聴あつめ故八文字が／文勢に倣ひて怜何可／笑かきたる話本なり／芝翠館蔵

(傍線引用者)

という『諸道聴耳世間狙』に与えた書肆の評価が見られる。『諸道聴耳世間狙』の序文と山田屋嘉右衛門版の『諸道聴耳世間狙』の見返しの内容を合わせて見ると、『諸道聴耳世間狙』の題材として、「世の噂」、「戯れ草」、「当時流行の珍説」を挙げることができる。

「世の噂」、「当時流行の珍説」は、当時、実在人物をめぐる噂話、及び人々の関心が寄せられ、流

行っていた奇談を指していると考え。

また、森山重雄の『上田秋成初期浮世草子評釈』によれば、「戯れ草」は、「たわむれにものした草子」である⁽²⁵⁾。そして、前述したように、『諸道聴耳世間狙』の創作は、『世間妾形氣』と同じく、西鶴、其磧、自笑、南嶺の浮世草子を意識していた。そのほか、上田秋成は、二十七歳以前、小島重家を知り、数々の「あざりの古物がたり」を聞き、古学の指導を受けていた⁽²⁶⁾。さらに、上田秋成は懷徳堂の五井蘭州を「五井先生」と呼び、漢文学や白話に通じている富士谷成章や勝部青魚も友人であった⁽²⁷⁾。ため、中国の古典と接触したことがあると推測できる。それ故、『諸道聴耳世間狙』の題材としての「戯れ草」は、主に日本の古典、先行浮世草子、中国古典を意味していると言えよう。総じて言えば、『諸道聴耳世間狙』の題材は、主に実在人物をめぐる噂話、日本の古典、先行浮世草子、中国古典、流行っていた奇談からなっていると考えられる。

まず、『諸道聴耳世間狙』に描かれた実在人物をめぐる噂話に関する論考では、モデルとしての実在人物の判明に力を入れている。

早くも、寛政七年（一七九五）刊の『当世癡人伝』⁽²⁸⁾ 卷之二「万金丹」には、「瓜生ハ坂町ノ茶屋ナル世間狙ニミユ伝ハ二編ニアリシ」という記述があり、『諸道聴耳世間狙』四之卷二「評判は黒吉の役者付あひ」の「瓜生」のモデルが、坂町の茶屋の瓜生だと指摘した。

そのほか、「増訂一話一言」⁽²⁹⁾ 卷二十七の享和二年（一八〇二）九月八日の浪花田宮の書状には、

世間狙其まゝ奉差上候柳里恭御事杯は全松慶尼處女の時分京侍之男妾メケといったし天王寺村に養ひ置
申候事を里恭柳氏に託し書申候よし惣て甚敷人の徳を損し候書形にてが野子が不好筆鋒にて御座
候と乍憚御憐察可被下候
(傍線引用者)

と記されている。また、享和二年（一八〇二）十一月の『羈旅漫録』⁽³⁰⁾では、「秋成が書るものに

ゆきがみそか男を。柳里恭なりと記せしは。甚非なりといへり」という記述が見られる。このように、『諸道聴耳世間狙』三之巻一「器量は見るに煩惱の雨舎り」に描かれた実在人物は誰なのかについて、早くから人々の関心が寄せられたことがわかる。

その後、中村幸彦は、「秋成に描かれた人々（一）」（『國語國文』三十二巻一号、昭和三十八年一月）で、『諸道聴耳世間狙』に描かれた実在人物を詳細に検討した。堤邦彦の「諸道聴耳世間狙の構造——世間と伝承——」（『國語と國文學』第五十七巻第三号、昭和五十五年三月）、浅野三平の「『世間狙』をめぐる二、三」（『上田秋成の研究』、桜楓社、昭和六十年二月）、徳田武の「秋成の隠微——『諸道聴耳世間狙』に即して——」（『日本近世小説と中国小説』、青裳堂書店、昭和六十二年五月）、井上敏幸の「『諸道聴耳世間狙』冒頭話のモデル」（『上田秋成全集』月報五、平成三年八月）、山本秀樹の「『諸道聴耳世間狙』の意味」（『近世文藝』七十号、平成十一年七月）、長島弘明の「秋成浮世草子のゴシップ性——和訳太郎論」（『秋成研究』、東京大学出版会、平成十二年九月）、神谷勝広の「秋成『諸道聴耳世間狙』とモデル——南嶺から秋成へ」（『秋成文学の生成』、森話社、平成二十年二月）、宍戸道子の「『諸道聴耳世間狙』巻一の一の素材——道修町の小西家と当代——」（『国文学研究』百六十五号、平成二十三年十月）などは、中村幸彦の「秋成に描かれた人々（一）」に続き、当時の社会の出来事に関する記録から、新たに発見された『諸道聴耳世間狙』に描かれた実在人物を考察した。

その次に、『諸道聴耳世間狙』と日本の古典、先行浮世草子、中国古典との関連について、最も詳しい研究として、高田衛の『定本上田秋成研究序説』（国書刊行会、平成二十四年十月）が挙げられる。その他、中村幸彦の「諸道聴耳世間狙」（日本古典鑑賞講座第二十四巻『秋成』、角川書店、昭和三十三年九月）、浅野三平の「諸道聴耳世間狙論」（『女子大國文』十五号、昭和三十四年十月）、浅野晃の「秋成と西鶴」（『文芸研究』第三十三集、昭和三十四年十一月）、伊東明弘の「上田秋成の浮世草子」（国文学論叢第六輯『近世小説 研究と資料』、至文堂、昭和三十八年十月）などでは、『諸道聴耳世間狙』と日本の古典、先行浮世草子との関連性が論じられた。後藤丹治の「秋成の舊作と雨月物語——